

# 保健体育科教員志望学生の体育授業に対する意識の分析

An Analysis of Attitudes toward Physical Education Teaching among Students Aspiring to Become Health and Physical Education Teachers

泉 翔 王 (金沢大学大学院人間社会環境研究科)

Shoo IZUMI (Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies Kanazawa University)

櫻 井 貴 志 (人間科学部スポーツ学科教授)

Takashi SAKURAI (Faculty of Human Sciences, Department of Sports Science, Professor)

## 〈要旨〉

本研究では保健体育科教員を志望する学生の中学校・高校の体育授業に対する意識について、体育の理論的内容の重要性を中心に分析した。具体的には、中学校・高校期の体育経験と体育授業に対する意味づけ、体育理論の学習経験や意識に関して分析・検討した。分析の結果、体育授業で座学を経験したと回答したものは約5割であった。保健体育科教員志望学生は、体育の理論的内容がスポーツの楽しさや生きがいにつながり、理論的内容を学ぶ必要があると捉えている一方で、その授業形態は「実技」が望ましいと考えていた。体育理論領域においては特に「スポーツの技能を高める練習法」「心身への影響」の「学習の意欲」が高かった。しかし「安全確保」に関しては、唯一「学習の意欲」が「理解の程度」を下回る結果となった。保健体育科教員を志望する学生は、体育理論の授業を実施する際に不安や苦手意識があることが明らかになった。

## 〈キーワード〉

体育理論、体育の認識、保健体育科教員養成、体育授業

## 1 背景

現代の体育の課題として運動する子どもと運動しない子どもの二極化、子どもの体力低下、さらに運動への関心や運動する意欲、各種の運動の楽しみや喜び、その基礎となる運動の技能や知識などの生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が挙げられる。佐藤・友添 (2011, p.3) はスポーツという文化を新たに創造していくために、これからの体育には「理論」の学習が求められ、「体育理論」の学習が重要な意味を持つことを指摘している。今後、上記の問題解決を担う中心的な役割を果たすのが体育授業で行われる「体育理論」であり、学習指導要領にも学修すべき内容が示されている。現行の指導要領 (2018年告示高等学校学習指導要領解説) において体育理論については「『する、みる、支える、知る』といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを主体的に実践できるようにするため、主に現代におけるスポーツの意義や価値、科学的、効果的なスポーツの実践、豊かなスポーツライフの設計等に関わる内容で構成」していることが明記されている。

しかし、学習指導要領の内容として授業を実施することが明示されているにもかかわらず、実際の実施率の低さが問題視される。大河 (2017) は教育分野で「学力」が問題とされるとき、体育では「体力」が問題視されること、体育理論領域の授業を実施するには「内容の扱いづらさ」「子どもの反応が良くない」「運動することが重要」などの課題の存在に言及している。さらに体育理論の実施については2割以下ではないかと推測される (村瀬ほか, 2016) ほど低調である。このような状況では、予測困難な社会を生き抜くこれからの子どもたちが、生涯にわたって豊かなスポーツ生活を営むことはできないのではないだろうか。体育の諸問題の解決や豊かなスポーツ生活を営むための資質・能力の育成に対応した内容が「体育理論」で定められているにもかかわらず、授業現場で実施に至っていないのは体育の理論的内容が重視されていないことが要因ではないかと考えた。

## 2 先行研究の検討

### 2-1 求められる体育の役割

佐藤・友添(2011, p.15)は今求められている体育について知識基盤社会という今の時代を的確に捉え、21世紀に生きる子どもたちが健康で生きがいをもって生涯を生き抜いていくには、運動やスポーツが一層重要になるとしている。そのため、運動やスポーツを通して楽しさや技術を身につけるといふ場だけでは終わらせることなく、知的なレベルで捉え「できる」ことと同時に体育の理論的内容の社会的意味や文化的意義を理解させることを重視すべきだと指摘している。

「実技」ばかりでの体育授業では、体育によって身につく「する、みる、支える」のスポーツとの多様な関わりができていないのではないだろうか。「する」だけでなく「みる、支える」の視点から、スポーツを学び理解することが学校体育の使命であり(吉田, 2016)、学校体育で理論的内容を学ぶことによって豊かなスポーツ生活を実現する資質・能力を育むことができるだろう。知識を身につけたことでできること、できたから理解し深まる知識がある。それらの積み重ねがスポーツ生活の継続へつながると考える。身体形成と知的な深まりの双方をすべての生徒に平等に保障できるのは学校体育であろう。生徒らは、自らの手で自らの人生を選択していかねばならず、そのために体育では「知識、技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成が図られる。しかし体育では「技能」の育成に偏り、「する」に重点が置かれた授業が行われている傾向が高いのではないかと考える。現状の体育で「知識」や「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を生徒たちは育てているのか、あるいは学べているのか。大きな疑問を感じる点である。現状の体育授業は各運動領域で学ぶことを通じて生涯にわたってスポーツに親しむ資質・能力の育成を図ることを目標にはしているが、本当にこれらの資質能力を育む場として、役割を果たしているのだろうか。

### 2-2 体育の知識について

2008年告示中学学習指導要領では、「確かな学力」を身につけることが提言されたが、大河が指摘するように、体育における学力としての理論的内容が必ずしも重要視されているとは言えないだろう。生徒は運動・スポーツに関する知識の学習を経験しないまま学校期を終える可能性もあるのではないだろうか。

2017年告示中学校学習指導要領解説では体育分野の知識について形式知、暗黙知の両知識は意欲、思考力、運動の技能などの源とされている。生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の育成のためには、運

動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実、つまり知識を基盤とした学習の充実が必要であることが記されている。これに関して、佐藤・友添(2011, p.9)は学習指導要領に定められた体育の知識の総合体として、①体の動かし方や運動の行い方に関する知識、②体力や健康・安全に関する知識、③運動実践につながる態度に関する知識、④生涯スポーツの設計に関する知識の4つに分類し、これらを「A. 体づくり運動」から「H. 体育理論」領域と関連させ、総合的に学ぶことで生涯に通じたスポーツライフを実現するための資質や能力を育むことができる」と述べている。体育授業は「する」ことの面白さを伝えるだけでなく、運動やスポーツの価値、文化的意義などの知識を併せて伝えることで、より生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力を育むことができるのではないだろうか。

### 2-3 学習指導要領における「体育理論」

学習指導要領は今までに7度の改定が行われており、時代背景や子どもの実態に応じて変化し、教育活動に直結する改訂となっている。2008年改訂学習指導要領から体育に関する知識は「体育理論」と各運動領域に整理された。「体育理論」はまとまりとして学ぶことで効果が得られる内容であり、各運動領域は運動領域内で学ぶことで効果が得られる内容とされた。加えて中学校・高校のつながりを意識し、各学年での内容が明確化・体系化が示された。2017年告示中学校学習指導要領では、「A. 体づくり運動」から「H. 体育理論」の8領域や保健領域で見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けて学習する能力を育むことを目標とし、体育の実技だけでなく、「A. 体づくり運動」から「H. 体育理論」、保健領域を関連させ「する、みる、支える」といった生涯にわたるスポーツ生活を営むための資質・能力を育成することが望まれている。さらに、2009年告示高等学校学習指導要領解説編で「学校において特に必要がある場合には、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することもできる」と記述があるように、生徒の興味・関心、地域の実情に合わせた内容を体育理論として提供することが可能となっている。

## 3 研究の目的

「体育理論」は生徒が生涯にわたって豊かなスポーツ生活を営んでいくために必要な資質・能力を育むために必要な内容であると考えられる。しかし、先行研究から体育理論の実施率は決して高くなく、学校期における体育理論の授業経験が生徒の運動・スポーツに対する「実技」あるいは「理論的内容」の学びに影響を及ぼしているのではないかと考えた。本研究では、保健体育科教員を志望する学生の中学

校・高校時の体育経験と体育授業に対する認識、次に体育理論として学習すべき領域、その授業形態について分析・検討することを目的とする。以上の問題意識及び目的から、次の研究課題に取り組む。

#### 研究課題1

保健体育科教員を志望する学生の中学校・高校期の体育経験や体育授業に対する認識を明らかにする。具体的には、運動・スポーツの知識を身につけた場所や体育授業の場の意味づけ、体育理論領域に関する「学習の意欲」について検討する。

#### 研究課題2

保健体育科教員を志望する学生の体育の理論的内容における学習経験や認識を明らかにする。具体的には、体育での座学授業経験の有無、理論的内容を教える授業形態、理論的内容への認識を検討する。

#### 研究課題3

保健体育科教員を志望する学生の体育理論に対する重要性の認識、体育理論領域における「理解の程度」を把握する。

## 4 研究方法

### 4-1 調査対象・実施期間

本研究では中学校・高等学校の保健体育科教員志望者が履修する保健体育科教育法の受講生（KS大学の1年生、2年生及び4年生）を対象にアンケート調査を行った。なお、アンケートは無記名で行った。実施期間は、令和2年11月18日（水）から令和2年11月23日（月）である。結果、配布数141件、回収数141件であり、回収率は100%であった。有効解答率は122名（86.5%）であり、学年の内訳は1年生52名、2年生44名、4年生26名であった。

### 4-2 アンケート内容

調査内容は以下のとおりである。具体的にはこれまでの体育授業の経験や捉え方に関する項目と体育（保健を含まない）の座学に関する意識、体育の理論的内容の認識、体育理論の重要度、体育理論領域の「理解の程度」「学習の意欲」に関して回答する項目を作成した。各質問に対する回答は、質問内容に対して当てはまる選択肢から選択する方式と自由記述方式を用いた。

「運動、体育授業に関する捉え方について」の質問項目は松木ほか（1988）の教員養成大学に学ぶ学生の「運動」及び「体育」認識に関する質問項目を参考にした。体育理論領域に関する質問は、山元ほか（2015）の「体育理論領

域における課題の検討」の質問方式を参考にした。

### 4-3 分析方法

アンケートで得られたデータを集計し、SPSS (statistics. subscription) を用いて単純集計及びクロス集計を行った。

## 5 結果・考察

### 5-1 中学校・高校期の運動の知識獲得をした場

表1は中学校・高校期に運動・スポーツの知識を身につけた場所を明らかにしたものである。「中学校・高校期に運動・スポーツの知識（ルール、技術の身につけ方等）を得た場所はどこですか」と質問し、以下項目から複数回答可で答えてもらった。その結果、「部活動」が122名中112名（91.8%）と最も高く、次いで「体育授業」が122名中103名（84.4%）だった。

運動・スポーツの知識が身についた場として「体育授業」と「部活動」が重要な役割を担っている事がわかった。しかしながら、「体育授業」よりも「部活動」の方が運動の知識を身につけた場として認識されている事が明らかになった。保健体育科教員を志望する多くの学生は中学校・高校期に運動部活動に所属していたと推測でき、各運動部活動で専門性の高い知識を身につけ、「する」に特化した運動・スポーツの知識を獲得している可能性がある。一方、84.4%の者が「体育授業」で運動・スポーツの知識を身についたと回答したが、裏を返せば15.6%の者は体育で運動・スポーツの知識を身につけていないと回答していることになり、体育は知識を身につける授業ではないと捉えていたとも考えられる。一定数ではあるが、「地域スポーツ」22名（18%）、「SNS」19名（15.6%）、「ネット」33名（27%）と学校外で運動・スポーツと関わることによって、運動・スポーツの知識を身につけていることが明らかになった。

表1 運動・スポーツの知識を身につけた場所

	n	%
体 育	103	84.4%
部 活 動	112	91.8%
地域スポーツ	22	18.0%
S N S	19	15.6%
ネ ッ ト	33	27.0%
そ の 他	6	4.9%

### 5-2 中学校・高校期の体育における場の意味づけ

図1は、中学校・高校期の体育授業をどのように捉えていたのかを示したものである。

中学校・高校期の体育授業の捉え方として、「あなたは

これまでの体育授業をどのような興味・関心で受けとめてきましたか。」と質問し、以下項目に複数回答可で答えてもらった。「技能を身につける場」122名中79名(64.8%)が最も多く、続いて「健康づくり・体力づくりに必要な場」69名(56.6%)「知識を身につける場」56名(45.9%)、「仲間づくりの場」55名(45.1%)、「身体・健康・運動についての理解を深める場」49名(40.2%)、「心身の開放の場」48名(39.3%)となった。

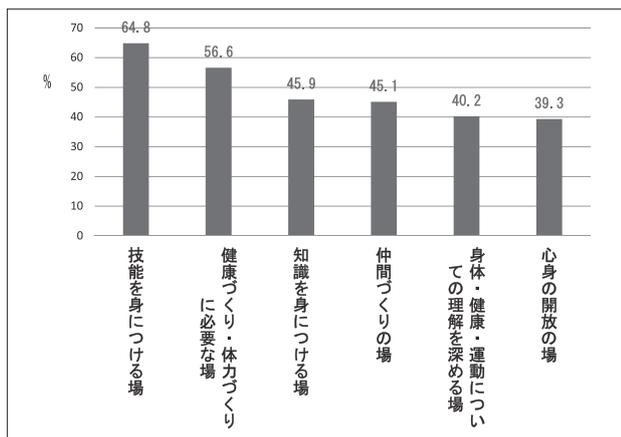


図1 中学校・高校期の体育の捉え方

体育授業は半数以上が「技能を身につける場」、「健康づくり・体力づくりに必要な場」として捉えられ、「する」という側面が強いことが明らかになった。一方、「知識を身につける場」として捉えている者が半数を下回ることも明らかとなった。

### 5-3 体育理論領域への「学習意欲」

図2は2009年改訂高等学校学習指導要領体育理論領域における8項目の「学習の意欲」について、回答の得点を平均し示したものである。「学習したい」を4点、「どちらかといえば学習したい」を3点、「どちらかといえば学習したくない」を2点、「学習したくない」を1点で得点化し、各項目の平均点を算出した。

結果、「安全確保」以外の項目は平均点3点以上を示し、全般的に「学習の意欲」が高いことが明らかになった。特に「スポーツの技能を高める練習法」「心身への影響」については「学習の意欲」が高かった。これは、知識を身につけた場として「部活動」と「体育授業」が挙がり(表1参照)、また、体育授業を「技能を身につける場」、「健康づくり・体力づくりに必要な場」と捉えていた(図1参照)ことから、体育理論の項目では「学習の意欲」の高い領域になったのだと推測する。なお、「安全確保」は唯一平均が3点を下回る結果となった。「安全確保」に関しては体育授業、部活動で十分な意識づけが行われていることに起因し「学習の意欲」が低くなっていると推測される。体育

の授業に関して「知識を身につける場」と捉えている学生は、半数以下にも関わらず、体育理論の領域に関して「学習の意欲」は高いことが明らかになった。

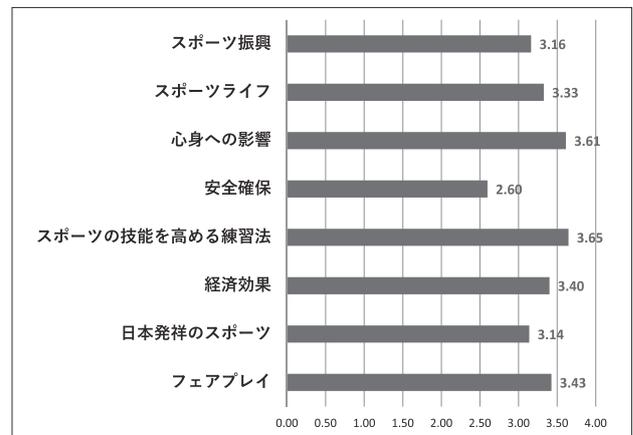


図2 体育理論領域の「学習の意欲」

### 5-4 体育の授業形態に関する意識

次に体育の座学に関する意識を明らかにするため、体育の座学経験と必要性の認識を聞いた。その結果が表2である。表2は「体育での座学経験の有無」と「体育授業を教室でも行うべきか」をクロス集計したものである。まず「体育での座学経験の有無」だが、座学を経験したことがある学生は121名中59名(48.8%)であり、経験したことがない学生は121名中62名(51.2%)であった。「体育理論」を実施するにあたって明確な時間数や実施内容が示されているにもかかわらず、座学経験が約半数だったことが明らかになった。

表2 「体育での座学経験の有無」と「体育授業を教室でも行うべきか」

		教室で体育の座学授業を受けたことがありますか					
		はい		いいえ		合計	
		n	%	n	%	n	%
体育授業は教室でも行われるべき	はい	28	70.0%	12	30.0%	40	100.0%
	いいえ	31	38.3%	50	61.7%	81	100.0%
	合計	59	48.8%	62	51.2%	121	100.0%

次に必要性について確認する。「体育授業を教室でも行うべきか」について、体育授業で座学を経験していない者62名(51.2%)中50名(80.6%)が、「体育授業を教室で行われるべき」に「いいえ」と回答した。さらに、体育の座学授業経験者59名(48.8%)に関しても、59名中31名(52.5%)が「体育授業は教室で行われるべき」に「いいえ」と回答した。黒澤(2018)は、生徒及び教員が「体育は実技科目」という認識を持っていると述べていることから、体育授業は教室で座学を行うのではなく、体育館や運動場

で体を動かし、運動・スポーツの技能を高める場として捉えていることが考えられる。そのため、体育授業は教室で行われるべきではないと回答した者が多くなったと推測する。学生の体育理論領域における「学習の意欲」が高かったのにも関わらず、実際には体育での座学授業の実施率が低くなっていることが明らかになった。

#### 5-5 体育の理論的内容を教える授業形態と意識

表3は理論的内容を教える授業形態に関する意識を表したものである。そこでは、121名中79名（65.3%）が実技での授業形態が望ましいと回答し、121名中37名（30.6%）が座学の実施が望ましいと回答した。その他の回答では「実技授業での導入」や「実技、座学どちらとも」という意見があった。佐藤、友添（2011, p.9）は、「青空の下での体育授業をちょっと我慢してでも、教室で運動やスポーツの広範で精選された知識を学ばせることは、長い目で見たら、子どもたちの人生をきっと豊かにしてくれます。」と述べている。これまで体育授業は、実技中心で行われてきたが、座学での体育授業を行う重要性を高めることにより、これまで以上に運動・スポーツを楽しめる生徒が増えていくのではないだろうか。

表3 理論的内容を教える授業形態

	n	%
実 技	79	65.3%
座 学	37	30.6%
その他	5	4.1%
合 計	121	100%

表4は「体育の理論的内容の認識」を示した。体育の理論的内容がスポーツの楽しさや生きがいにつながると122人中103名（84.4%）の学生が回答し、体育の理論的内容を生徒が学ぶ必要の有無では121名中87名（71.9%）が必要であると回答した。これらの結果から、学生は学校期に体育の理論的内容を学ぶ必要があると考えていること、さらには、運動・スポーツの楽しさや生きがいにつながると考えていることがわかった。しかし、体育の理論的内容を学ぶ必要がないと回答する者（34名、28.1%）も一定数存在することが明らかになった。「学習の意欲」の意欲は高いのにも関わらず、理論的内容を学ぶ必要性はないと相違のある結果となった。

表4 体育の理論的内容の認識

体育の理論的内容がスポーツの楽しさ・生きがいにつながる	103名	122名中	84.4%
体育の理論的内容を生徒が学ぶ必要がある	87名	121名中	71.9%

表3、4から体育の理論的内容がスポーツの楽しさや生きがいにつながり、生徒は理論的内容を学ぶ必要があると考えていながらも授業形態としては「実技」での実施が望ましいとしていることが明らかになった。理論的内容を行う際、「実技」中心で行うという認識で捉えているのは学校期の体育授業で座学での授業を経験したことがないことが、体育授業は実技というイメージを強めているのではないだろうか。吉田（2016）は、体育理論の実施について「『雨降り体育』（雨降り用の『穴埋め番組』）として、あるいは各単元の、例えばオリエンテーションの一コマとして実践されるレベルの扱いであり、決して系統立てて行われていたとは言い難い状況であった」と述べている。体育理論の実施率が低いとの指摘も踏まえると、保健体育科教員を目指す学生は、実際に体育理論の授業を体験していないため、体育理論に関する授業内容や実施に関する指導方略のイメージができにくいのではないかと推測する。

#### 5-6 「体育理論」の重要度

次に体育の各領域でどの領域が重要視されているか検討するため各領域の重要度を聞いた。図3は学習指導要領に記載されている各領域の重要性の認識を順序化したものである。順序化には1位に8点、2位には7点、7位には2点、8位には1点という順で点数化し、それを加算した後、点数の一番高い教科から順位をつけた。その結果、学習指導要領における各領域の中で一番重要だと思われるのは「体づくり運動」、次に「球技」「陸上競技」の順で続き「体育理論」は6位であった。その下には「武道」が続き、最下位は「ダンス」であった。体育の理論的内容がスポーツの楽しさや生きがいにつながると考えていても「体育理論」の順位は低い結果であった。「体育理論」は「生涯にわたる豊かなスポーツライフを卒業後も主体的に実践できるようにするため、主に現代におけるスポーツの意義や価値、科学的、効果的なスポーツの実践、豊かなスポーツライフの設計等に関わる内容で構成（高等学校学習指導要領解説）」されており、運動・スポーツ全般に関わる体育の領域である。体育の理論的内容が生涯にわたってスポーツの楽しさや生きがいにつながると考える学生が多いにもかかわらず、「体育理論」の重要度は低くなっている。「健康なからだ」あるいは「〇〇が出来る」といった目に見える、即効性のある側面が学生の内面で重視され、文化としてのスポーツを自分自身の豊かなスポーツライフを生涯にわたり設計し、実践するという側面が軽視されているのだ

とすれば、これは大きな課題であると言えよう。

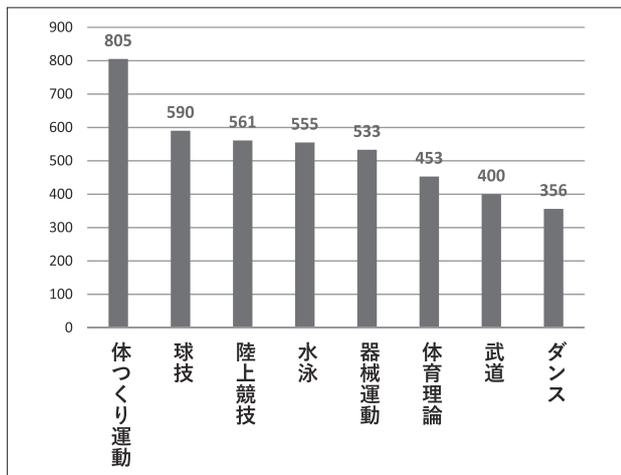


図3 体育で必要だと思う領域の順位

### 5-7 体育理論領域の「理解の程度」

図4は2009年改訂高等学校学習指導要領体育理論領域における8項目の「理解の程度」と「学習の意欲」について、回答の得点を平均し示したものである。「理解の程度」では、「知っている」を4点、「どちらかといえば知っている」を3点、「どちらかといえば知らない」を2点、「知らない」を1点というように得点化し、各項目の平均点を算出した。

まず「理解の程度」を確認すると、「スポーツ振興」を除く7項目では2.5点以上を示し、「知っている」「どちらかといえば知っている」傾向であると言えるだろう。

「フェアプレイ」「安全確保」「心身への影響」に関しては、各運動領域、保健領域を関連させ授業を行なっていることや、部活動で身についた知識によって「理解の程度」の数値が比較的高くなったと推測する。その点「日本発祥のスポーツ」「経済効果」「スポーツ振興」の3項目は他と比較すると「理解の程度」は低い結果となった。この3項目は体育の授業を行う際に実技中心で行われてきたこと、他領域とのつながりが希薄だったことに起因して理解は高まらなかったと推測する。なお、図2の「学習の意欲」と比較すると「安全確保」を除く7項目で「理解の程度」が「学習の意欲」を下回っている。

体育理論の指導に関する意識について自由記述からも確認する。学生は「体育理論」の授業を実施する際の課題を持っており「学習意欲を持たせて学ばせるのは難しく、しっかり理解させられる気がしない」「知識が少ない」「(保健体育科教員養成課程で)保健のように模擬授業を行っていない」「体育の実技を楽しみにしている生徒に対して、興味を引くような授業展開を構成できる気がしない」という内容を記述している。福地ほか(2018)は「運動の教材に対する知識理解、教授方法など、児童生徒時代に意識す

ることはない」と述べ、座学授業を経験した割合が低かったことから鑑みても、児童生徒時代の教材に対する知識や授業方略について把握していない可能性が高いと考えられる。保健体育科教員を志望する学生は「学習の意欲」を理解に結びつけるための授業方法について選択肢を有しておらず、「体育理論」に対する認知が十分ではないと予想される。

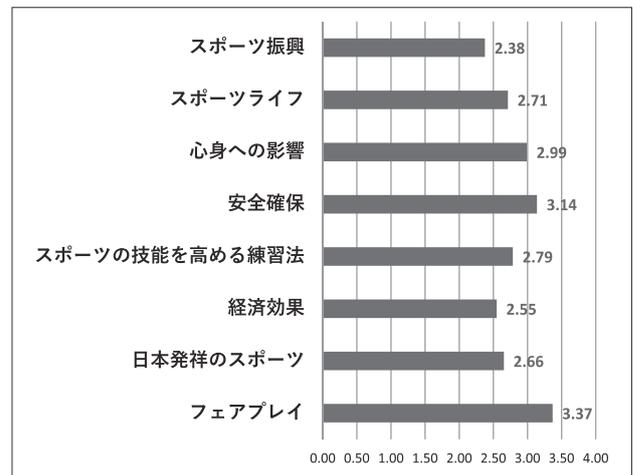


図4 体育理論領域の「理解の程度」

この結果から、保健体育科教員を目指す学生は、理論的内容に関するこれまでの体育授業経験によって「学習の意欲」を喚起させる体育授業については経験してきている。しかし、その体育授業は理論的内容が「理解」につながる授業ではなかったと言えよう。特に生涯にわたってスポーツライフを営むために必要な「スポーツライフ」「スポーツ振興」の「理解の程度」が低く、体育で実施されている運動・スポーツの知識・技能が日常生活に十分活用できていないことが予測できる。体育授業では「する」といった関わりだけでなく、体育の理論的内容を理解させ、生涯にわたってスポーツを営めるように「みる、支える」といった資質能力・態度の育成を目指さなければならない。理論的内容が重視され「する」以外の運動・スポーツの「みる、支える」といった関わり方が学ばれることにより、生涯にわたって運動・スポーツをさらに楽しめるのではないだろうか。そのためには、「体育理論」授業を行うといった教授の立場の者は、さまざまな領域と関連させて指導できるよう「体育理論」に対する深い理解が必要であるだろう。

## 6 結論

本研究は、保健体育科教員を志望する学生の中学校・高校時の体育経験と、体育授業に対する認識、次に体育理論として学習すべき領域、その授業形態について分析・検討することを目的とした。具体的には、保健体育科教員を志望する学生の中学校・高校期の体育経験や体育授業に対す

る認識を明らかにすること（研究課題1）、保健体育科教員を志望する学生の体育の理論的内容における学習経験や認識を明らかにする（研究課題2）。保健体育科教員を志望する学生の体育理論に対する重要性の認識や、体育理論領域における「理解の程度」を把握する（研究課題3）。

本研究が明らかにした内容は下記の通りである。

### （1）保健体育科教員を志望する学生の体育授業に対する認識

はじめに、学校・高校期の運動の知識を獲得した場では「部活動」が最も多く、次に「体育授業」となった。体育授業は「技能を身につける場」であること、「健康づくり・体力作りに必要な場」と多くの学生が意味づけており、体育の「する」側面として捉えていることが明らかになった。そして、体育の「知識を身につける場」として捉えている者は約半数だった。しかし、体育理論領域全般的に「学習の意欲」が高いことが明らかになった。特に「スポーツの技能を高める練習法」「心身への影響」は「学習の意欲」が高く、「部活動」や他領域との結びつきが有機的に機能していたと推測する。

### （2）体育の理論的内容における学習経験と認識

次に、体育授業で座学を経験したことがある者は、59名（48.8%）であった。座学経験がない場合、「体育授業は教室でも行われるべき」に否定的回答をするものが多かった。座学経験がある場合でも、「体育授業は教室でも行われるべき」に否定的回答をした。この結果から、体育授業は教室で行うべきではないと捉えていることが示唆された。他方で、理論的内容の学習について、多くの学生がその必要性について認識しており、理論的内容がスポーツの楽しさ、生きがいにつながると考えていることが明らかになった。理論的内容の授業形態としては「座学」と回答したものは少ない結果となった。学生がこれまでに受けてきた学校期の体育理論の授業は系統立てて行われているとは言い難い状況であること、実施率が低くなっていることから体育理論に関する授業内容がイメージしづらく、認知されているとは言えないことが示唆された。

### （3）「体育理論」の重要度に対する意識と体育理論領域における「理解の程度」

「体育理論」の重要度について、学習指導要領における各領域の中で一番重要とされているのは、「体づくり運動」であり、その次に「球技」「陸上競技」と続き、「体育理論」は6番目となった。理論的内容が生涯にわたってスポーツの楽しさや生きがいにつながると多くの学生が捉えているのにも関わらず、「体育理論」の重要度が低くなってしまふことに関しては、今後検討が必要である。

体育理論領域の「理解の程度」では、「フェアプレイ」「安全確保」「心身への影響」に関しては、各運動領域、保健領域を関連させ授業を行なっていることや、部活動で身につけた知識によって「理解の程度」が比較的高くなったと推測する。しかし、「学習の意欲」と比較すると「理解の程度」は全体的に低い数値となっていた。これまでの体育理論領域に関する授業は、「学習の意欲」を喚起する授業が実施されてきているが、その授業が「理解」につながる内容ではなかったということである。「体育理論」の授業実践は成果があげられていないことが示唆された。保健体育科教員を志望する学生は「体育理論」の授業をする立場になったとき授業方法に関しての不安など、授業をすることに苦手意識があることが明らかになった。それは「体育理論」自体に関する認知が十分ではないことが示唆される。

保健体育科教員は学習者に体育の理論的内容が豊かなスポーツ生活を営む上で必要なことを理解させることが重要である。これまで行われてきた体育の「実技」授業による理論的内容の把握ではなく、教室で理論的内容である「体育理論」の学習を行うことで、より運動・スポーツに関して興味・関心を持ち、生涯にわたってスポーツと携わり合っていくことができるのではないだろうか。

### 今後の課題

本研究は体育科教員を目指す学生の体育の捉え方を検討したため、体育科教員を目指していない学生が体育をどのように捉えているかを把握する必要がある。体育に興味・関心がない学生の体育授業及び体育理論への意識を検討することにより、新たな知見が得られると考える。

## 参考文献

- 佐藤豊・友添秀則（2011）楽しい体育理論の授業をつくろう。大修館書店：東京
- 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編。東山書房：京都
- 大河紗弓（2017）生涯スポーツ社会を担う体育的学力を培う授業づくり―体育理論学習の位置づけの考察を通して―。愛知教育大学教育実践研究科（教職大学院）修了報告論集，8：141-150.
- 村瀬浩二・流川鎌語・三世拓也（2017）体育理論の実施状況と実施内容に関する考察。和歌山大学教育学部紀要。教育科学，67：1-5.
- 吉田文久（2016）学校体育における「体育理論」の新たな位置

- づけとその授業づくり(その1)―「文化としてのスポーツ」の学びを位置付ける授業の構想に向けて―. 日本福祉大学子ども発達学論集, 8: 1-14.
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領(平成20年告示). 東山書房: 京都
- 文部科学省(2017) 中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 保健体育編. 東山書房: 京都
- 文部科学省(2009) 高等学校学習指導要領(平成21年告示) 解説 保健体育編. 東山書房: 京都
- 松木正忠・萩原豊・鈴木武文・山西哲郎・松本富子・福地豊樹(1988) 教員養成大学学生の「体育」認識について―小学校の「体育」教育に必要な資質への問いかけ― 群馬大学教育実践研究, 5: 77-102.
- 山元秀太・坂本一真・蓑田修治・山田禎郎・則元志郎(2015) 体育理論領域における課題の検討 熊本大学教育学部紀要, 64: 247-252.
- 黒澤寛己(2018) 学校体育における「体育理論」の基礎的研究―「体育理論」授業の充実・発展に向けて―びわこ成蹊スポーツ大学紀要, 15: 87-94.
- 福地豊樹・中雄勇人(2018) 教員養成大学学生の「体育」認識について考える―小学校教科専門の授業を通して―群馬大学教育実践研究, 35: 125-135.